

# 水七景

小川未明

青空文庫



\*

村<sup>むら</sup>から、町<sup>まち</sup>へ出<sup>で</sup>る、途<sup>とちゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>に川<sup>かわ</sup>がりました。子<sup>こ</sup>どもは、お母<sup>かあ</sup>さんにつれられて、歩<sup>ある</sup>いていました。

橋<sup>はし</sup>をわたりかけると、子<sup>こ</sup>どもは、欄<sup>らん</sup>干<sup>かん</sup>につかまり川<sup>かわ</sup>を見<sup>み</sup>おろしました。水<sup>みず</sup>が、あとから、あとから、流<sup>なが</sup>れてきて、くいにぶつかっては、うずをまき、ジヨボン、ジヨボン、と、音<sup>おと</sup>をたてていました。子<sup>こ</sup>どもは、ふしぎそうに、それを見<sup>み</sup>まもり、

「お母<sup>かあ</sup>ちゃん、水<sup>みず</sup>が、なにかいっていますね。」と、いいました。「早<sup>はや</sup>く、道<sup>みち</sup>草<sup>くさ</sup>をとらんで、いらっしやいと、いっているのです

よ。」と、お母<sup>かあ</sup>さんは、答<sup>こた</sup>えました。

「この水<sup>みづ</sup>は、どこまでいくの。」

「そうですね、村<sup>むら</sup>や、町<sup>まち</sup>を通<sup>とお</sup>つて、海<sup>うみ</sup>へいくのですよ。」

二人<sup>ふたり</sup>は、話<sup>はな</sup>しながら、また、歩<sup>ある</sup>きだしました。岸<sup>きし</sup>の、ねこやな

ぎは、まだ赤<sup>あか</sup>いずきんをかぶつて、ねていました。

\*

今年<sup>ことし</sup>の、遠<sup>えん</sup>足<sup>そく</sup>は、昔<sup>むかし</sup>の、城<sup>しろ</sup>あとを見<sup>み</sup>にいくのでした。

ぼくたちは、田<sup>た</sup>んぼの、小<sup>こ</sup>道<sup>みち</sup>を歩<sup>ある</sup>いて、森<sup>もり</sup>のある村<sup>むら</sup>を通<sup>とお</sup>り、そ

して、さびしい小<sup>こ</sup>山<sup>やま</sup>のふもとへ出<sup>で</sup>ました。

そこが、城しろあとでありました。わずかにのこるものは、当時とうじ、とりでにつかつたという、青あおごけのはえた、大きな石いしと、やぶにかくれた、池いけくらのものです。その池いけには人ひとのいないとき、金きんの蔵くらが浮うくという、いいつたえがありました。

「みなさん、池いけはあぶないから、気きをつけるんですよ。」と先せん生せいは、いわれました。

くまざさをわけて、下したをのぞくと、水みずのおもてが、青黒あおぐろく光ひかつて、それへ、まわりの木きの枝えだから、たれさがる、むらさき色いろのふじの花はなが、美うつくしいかげをうつしていました。「ドボン。」と、どこかで、かえるのときこむ音おとがしました。

\*

ぼくたちの、泳ぎおよにいく川かわは、村むらの近ちかくにありました。水みづが、いつもたくさんで、きれいでした。浅あさいところは、そこにうずま  
る、白しろいせとものや、青あおい石いしころまですきとおって見みえました。  
橋はしのところから、川かわ下しもへいくにつれて、だんだん、深ふかくなりま  
した。

くるみの木きのあるあたりが、いちばん深ふかくて、ぼくたちの背せは、  
立たちません。ここでは、よく大おおきなふなや、なまずなどが、つれ  
ました。

今年ことしも、いつしかたのしい、泳およぎの季き節せつとなりました。おばあ

さんが、

「きゆうりの、初はつなりを、水すいじん神さまにあげなさい。」と、おつしやったので、ぼくは、畑はたけから、みごとなきゆうりを、もいできて、それへ、自分じぶんの名なを書かきました。そして、それを川かわへ流ながしにいきました。

ぼくは、ひさしぶりで、なつかしい川かわのおいをかぎました。水みずも、ぼくを見みて笑わらえば、太陽たいようまで、きら、きらと、よろこんで、歓かんげい迎むかしてくれました。

\*

地主は、縁側で、庭をながめながら、たばこをすつていました。そのとき、きたないふうをした、旅僧が、はいつてきて、「どうぞ、水を一ぱい、いただきたい。」と、もうしました。すると、地主は、つれなく、「この井戸の水は、金気があつて、のめない。どうぞ、よそへいきなされ。」と、ことわりました。

旅僧は、そのまま、だまつて、木戸口を出ていきました。

旅僧は、こんど、村はずれの、小さな百姓家へはいつて、たのみました。

「おやすいことです。さあ、たくさんめしあがれ。」と、いつて、あるじは、わざわざ井戸から、つめたい水をくんでくれました。

僧そうは、よろこんで、お経きようをあげて、たちさりました。

それからというもの、どんなひでりつづきで、ほかの井戸いどが、かれても、この家いえの井戸いどは、ご利益りやくで、水みずのつきることは、なかつたといひます。

## \*

ある夜よ、わたしが、町まちを歩あるいていると、広場ひろばの、くらがりに、人々ひとびとがあつまつて、なにか見みていました。

わたしも、そのそばへ近ちかづくくと、おじいさんが、大おおきな望遠鏡ぼうえんきようをすえつけて、お金かねをとつて、月つきを見みせているのでした。

「どうぞです、よく見えませんか。あの雲くものようなのが、山脈さんみやくで、ぼつ、ぼつが、噴火口ふんかこうのあとです。月の世界つきせかいには、水みずがないから、生物せいぶつもない。死しんだ世界せかいですよ。」と、おじいさんは、説明せつめいしました。

「ああ、それで、月つきは水みずがのみたいのか。」と、わたしは、思おもいました。

だから、どんな小ちいさな水みずたまりにも、また、細ほそい流ながれにも、月つきが、姿すがたをうつしていました。

わたしが、町まちを出でて、さびしい、小道こみちをいくと、畑はたけで、虫むしがなっていました。まだ、夜よふけともならぬのに、いもの葉はに、もう露つゆがおりていました。そして、その露つゆの玉たまにも、やはり、月つきのか

げが、やどつていました。

\*

秋あきの、うららかな日ひでした。  
 畑はたけから、とつてきた菜なの花はなを、  
 母はは親おやは、前まえの小川おがわで洗あらつてい  
 ました。

少しょう年ねんは、そのそばに立たつて、見みていました。毎まい年とし、いま  
 ごろになると、どこの家いえでも、冬ふゆの用意よういに、菜なをつけるのでした。  
 「まだ、なかなか。ぼく、おなかがすいた。」と、少しょう年ねんは、  
 いいました。

「もう、ちつとがまんをおし、じき終わりますからね。そうしたら、はいつて、ご飯はんのしたくをします。」と、母親ははおやは、答えこたました。

日ひが、だんだんと、西にしへかたむいて、水みずの上うえが、かげりはじめました。

そのとき、川かわ上かみから、新あたしい菜なの葉はが、流ながれてきました。

「お母かあさん、どこで、菜なを洗あらっているんでしょうね。」

「さあ、どこの家いえでしょうね。どこでも、このお天てん気きのうちには、菜なをつけるんですよ。きつと、このあとは、雪ゆきがふりますからね。」

ふと、このとき、少しょう年ねんの頭あたまに、ほかでも、こうして、母ははお

親をまつている、子どものあることが、うかびました。

\*

庭先の、大きな水盤には、夏から、秋にかけて、まつかな、すいれんの花がさきました。

また、きんぎよと、めだかが、なかよく、泳いでいました。

そのころ、毎日、一ぴきのはちが、水をのみに、とんできました。はちは、すいれんの、まるい葉のまん中へ、おりました。それから、水にひたる、葉のふちまで歩きました。

いつしか、秋が深くなると、すいれんの葉は、黒くくちて、水

の底へしずみましました。また、はちも、どこへいったか、こなくなりました。けれど、水盤の中では、あいかかわらず、きんぎよと、めだかが、泳いでいました。

とうとう、こがらしのふく、季節となりました。すると、水盤の水は、氷のように冷たかったです。ある日、子どもは、魚たちを、かわいそうに思って、小さな入れ物へうつし、あたたかな、自分のへやへもつてきました。しかし、冷たくとも、すみなれた場所のほうが、よかつたのか、一晩のうちに、いくひきか死んでしまいました。子どもは、おどろいて、あとの魚たちを、ふたたび、水盤の中に、もどしました。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「童話読本」

1948（昭和23）年9月

※表題は底本では、「水《みず》七一景《けい》」となっていて  
す。

※初出時の表題は「水とこども」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 水七景

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>